

日本古代宮都・宮室の構造と諸類型

木 原 克 司

(キーワード：宮都・宮室，条坊制都城，類型化)

I. はじめに

日本宮都・宮室の構造的な変化を巨視的にみると、天皇の私的空間としての小規模な宮室から、それらに小規模な公的空間を付加させた宮室、さらには諸官衙を内包する段階へと発展し、最終的には藤原京や平城京にみられるように、私的空間（内裏）、公的空間（朝堂）、官衙を包括した大規模な宮域の外側に主として貴族・官人・京戸等を集住させるための京を設けた中国式の条坊制都城の成立に至ると考えることができる。

こうした動きは、律令制度の整備を基盤とした天皇を頂点とする中央集権国家の形成と呼応したものであることはおおむね想像し得る。我が国が条坊制都城の建設にあたってモデルとしたと考えられる中国において漢代以降、従来の封建制から皇帝を頂点とした郡（州）県制による中央集権国家の成立に伴って坊里制都城の出現を見る。視点を変えれば宮都構造の分析は、我が国の律令制度の発達段階を窺うことのできる重要な指標となるものと言える。そこで本稿では、考古学の調査成果を踏まえて7～8世紀の日本宮都・宮室を規模と構造という2つの視点から類型化し、我が国における律令国家の成立過程について若干の考察を加えたい。

飛鳥地域およびその周辺に造営された7世紀代の宮都・宮室は、正宮および仮宮的なものを含めて正史には多くが記録されている。推古天皇の豊浦宮・小墾田宮、舒明天皇の飛鳥岡本宮・田中宮・厩坂宮・百済宮、皇極天皇の小墾田宮・飛鳥板蓋宮、孝徳天皇の難波長柄豊碕宮、齊明天皇の飛鳥川原宮・飛鳥板蓋宮・後飛鳥岡本宮、天智天皇の大津宮、天武天皇の嶋宮・後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮、天武天皇の新益京・難波京、持統・文部・元明天皇の藤原京がそれである。8世紀代になると、元明天皇の平城京、聖武天皇の恭仁京・難波京・平城京・紫香楽宮、淳仁天皇の保良宮、称徳天皇の由義宮、桓武天皇の長岡京・平安京が登場する。

これらの宮都・宮室の中で、考古学的な発掘調査により構造の一端が明らかにされているのは藤原京以降の条坊制都城を除けばわずかであるが、これまでの発掘調査の成果を踏まえて各宮都・宮室の規模・構造について検討するとともに日本の宮都の類型化を試みる。

II. 7世紀代の宮都・宮室の規模と構造

1. 飛鳥の都と7世紀代の宮都・宮室

古代人が「飛鳥」と意識していた空間は、『日本書紀』などに見える「飛鳥」と冠した諸宮の位置比定を通した岸俊男の研究¹⁾によれば、北は香久山南麓、南は島之庄・橘寺付近の主として飛鳥川右岸のきわめて狭い地域である。こうした地域が飛鳥の中核部を構成していたと考えられるが、近年の発掘調査によれば、宮殿、寺院、官衙や豪族の邸宅など中核部に展開した宮殿関連施設や寺院と関係する諸施設が周辺部に分布しており、これらも含めたより広い宮都空間を飛鳥地域と想定すべきかと思われる。

こうした飛鳥地域には、推古天皇の豊浦宮・小墾田宮、舒明天皇の飛鳥岡本宮・田中宮・厩坂宮・百済宮、皇極天皇の小墾田宮・飛鳥板蓋宮、齊明天皇の飛鳥川原宮・飛鳥板蓋宮・後飛鳥岡本宮、天武天皇の嶋宮・後飛鳥岡本宮・飛鳥浄御原宮など仮宮、正宮を含めた7世紀代天皇の宮室、飛鳥寺・豊浦寺・川原寺・橘寺などの寺院や亀石・酒船石・ミロク石などの石造物などが分布する。これらの遺跡・遺物の所在地点に着目し、それらが何らかの方格地割に合わせて造立されたとして岸俊男、網干善教、藤岡謙二郎、千田稔により様々な飛鳥京復原案が提示されたことがある²⁾。こうした見解の先駆けとなった岸説は、山田道以南の地域に山田道と中ツ道を基準線とする1町(106m)四方の方格地割の存在を想定するものである。しかし、石神遺跡等の飛鳥地域での新たな発掘調査の成果、各遺跡の測量データや各寺院の伽藍地割計画などの詳細な検討を踏まえた井上和人は、飛鳥

地域には宮室や寺院の位置を規制するいかなる方格地割も存在しないと結論づけた³⁾。ただ、最近になって黒崎直は、飛鳥寺周辺、川原寺・橘寺間、飛鳥京跡外郭などで検出されている道路遺構相互の距離関係や岸俊男がかつて指摘した飛鳥寺・川原寺両伽藍中軸線間の距離（約264.5m）などの詳細な検討を基に、飛鳥川兩岸の狭義の飛鳥地域に1／5里（約106m）と1／4里（約132m）を単位寸法とする2種類の方格地割の存在を想定している⁴⁾。しかし、黒崎のこの想定は飛鳥川の兩岸という狭い範囲での考察であり、さらに発掘調査で検出されていない推定道路などを含めたものであるため、道路間距離など細部においてなお検討すべき課題も多く、上記のような方格地割の存在を推定する黒崎自身も、飛鳥地域に藤原京以降の都城に見られるような碁盤目状の道路が測設されていたとは考えていないようである。

近年の発掘調査の成果を見るかぎり、飛鳥地域には後の条坊地割にあたるような碁盤目状の道路は存在せず、調査事例の詳細な分析を通して道路網の検討を行なった相原嘉之による復原（図1）⁵⁾が、7世紀頃の飛鳥地域の実態を如実に示すものと言えよう。図1からもわかるように、飛鳥の道路網は7世紀中頃以降固定された宮室

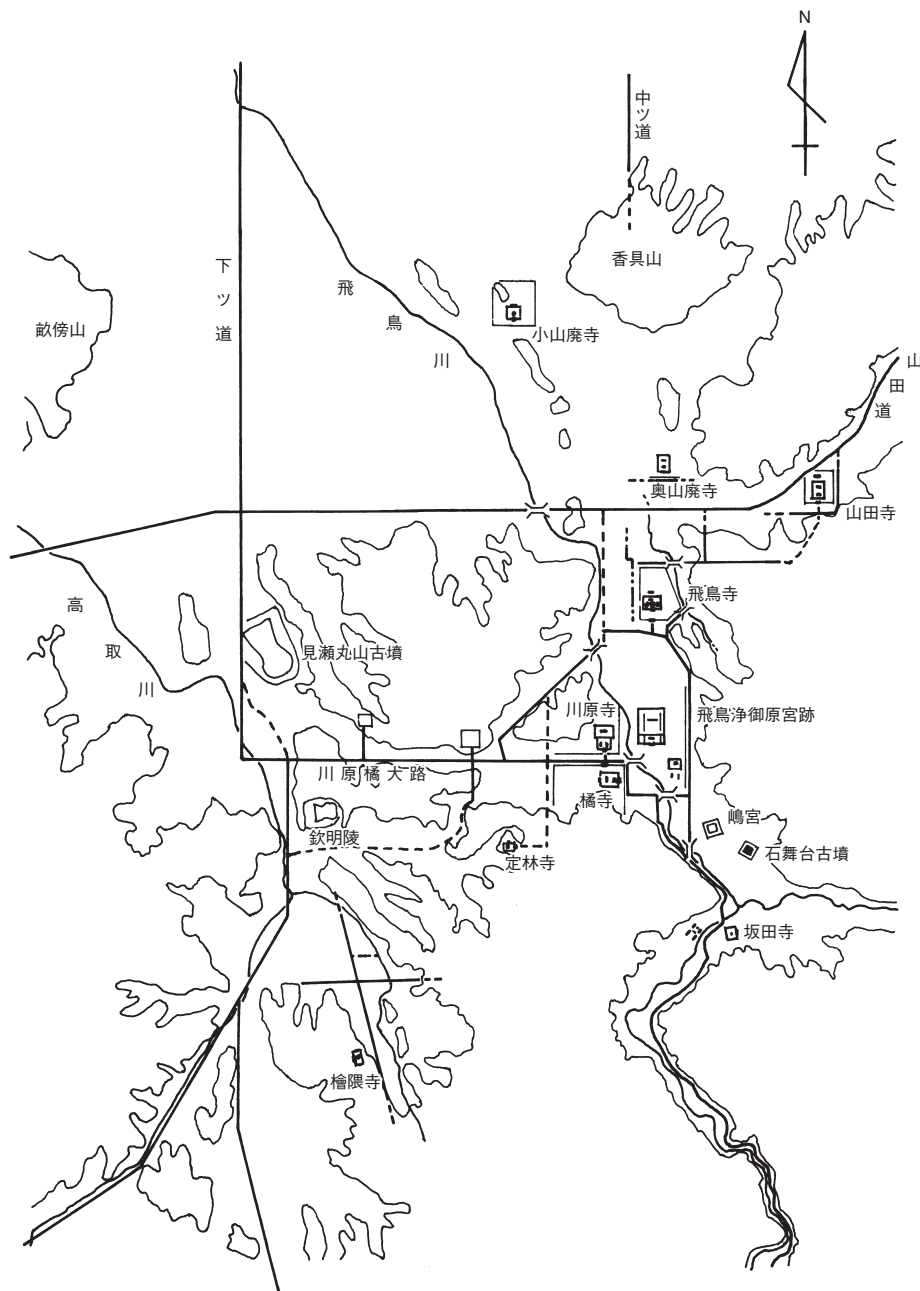


図1. 7世紀の飛鳥地域周辺道路網復原図（注5文献より作成。）

となった飛鳥京跡を中心に形成されており、川原寺と橘寺の間に測設された路面幅約11mの直線道路（川原橋大路）が、後の朱雀大路にあたる幹線道路であったようである。この道路はまっすぐ西に向かい見瀬丸山古墳の南方で大和盆地の南北古道の1つである下ツ道（後の平城京朱雀大路に直結する道路）に接続すると推定される。そして、7世紀代の飛鳥地域における宮殿・寺院・宅地は、徐々に拡大整備されていった道路網に沿って配置されたことになり、こうした配置形態は、藤原京以降の条坊制都市に見られるような碁盤目状に条坊大路・小路を測設し、道路によって囲まれた方格空間に宮殿・寺院・宅地を計画的に配置するシステムとは根本的に異なるものである。

こうした飛鳥地域に造営された7世紀代の宮都・宮室は、既に述べたように推古天皇の豊浦宮（593年）・小墾田宮（603年）をはじめとして多数あるが、豊浦寺や川原寺の発掘調査に伴って下層遺構としてその存在が確認されている豊浦宮・川原宮や雷岡東方遺跡の調査で小墾田宮に比定できる可能性のある建物群が確認されている程度であり、おおよその構造が明らかとなっているのは伝承飛鳥板蓋宮跡のみである。

豊浦宮は発掘調査⁶⁾で明らかになった講堂等の建物配置、周辺地形や瓦の分布から推定される豊浦寺の寺域（東西100m、南北200m程度）に近い規模の宮室と推測されており、河原宮も長年の発掘調査を経てようやく明らかとなった川原寺の寺域（南北約333m、東西約213m〔北面〕・約260m〔南面〕）⁷⁾とほぼ同じ規模と推定されている。伝承飛鳥板蓋宮跡は、これまでの発掘調査により全く設計の異なる3つの遺構群が重複していることが明らかとなっており、最も上層の第Ⅲ期の遺構群（A・B）をそれぞれ斉明天皇の後飛鳥岡本宮と天武天皇の飛鳥浄御原宮に、第Ⅱ期を皇極・斉明天皇の飛鳥板蓋宮に、さらに第Ⅰ期を舒明天皇の飛鳥岡本宮に比定している⁸⁾。このうち構造がおおよそ明らかとなっているのは図2に示した第Ⅲ期である。第ⅢA期の後飛鳥岡本宮の宮室（656年）は、天皇の私的空間（北院）と公的空間（南院）から成る内郭とエビノコ郭以北の外郭（官衙地区）から構成され、その規模は約300m四方程度である。そして最後の第ⅢB期の飛鳥浄御原宮の段階（672年）になって本格的な公的儀礼空間をエビノコ郭として新たに設けたと推定されている。言い換えるならば、後飛鳥岡本宮は天皇の住居である内裏と行政実務の場である官衙から構成され、内裏の南の空間（南院）に後の朝堂にあたる初歩的な公的儀礼空間（初歩的朝堂と仮称する）を付加した宮室であり、浄御原宮はそうした公的儀礼の空間を内郭部分から分離させてエビノコ郭として整備拡充した宮室と解することができる。その宮域の規模は第ⅢA期よりも一回り大きく、東西100～450m、南北720m程度と推定されている。第Ⅱ期の構造については不明な点が多いが、規模からみると第Ⅲ期の内郭と類似する構造と推定され、西側の飛鳥川との間や北方に官衙施設が設けられたと予想できる。

以上述べて来たように、7世紀代に展開された飛鳥地域の宮都（倭京）に造営された宮室の大部分は、数百メートル四方の小規模な天皇の私的空間（内裏）を中心として営まれたと考えられ、宮都には条坊地割は測設されず、後半に至っても内裏、初歩的段階の朝堂と官衙を包括した宮室を中心として、周辺道路に沿って寺院、官衙関連施設や豪族・貴族・官僚達の宅地を配置したものと言える。

2. 飛鳥地域以外の7世紀代の宮都・宮室

(1) 難波長柄豊碕宮

1954年以来現大阪市中央区馬場町・法円坂1丁目を中心として継続的に実施されてきた難波宮発掘調査の結果、ほぼ中軸線を同じくして前・後2時期の宮殿遺構の存在が明らかにされた。そのうち、『日本書紀』に記述された記事をもとに、白雉元年（650）に造営開始され白雉3年（653）に完成した孝徳天皇の長柄豊碕宮と、天武12年（683）の複都制の詔を契機として造営に着手され、朱鳥元年（686）に焼失した天武朝の難波宮を合わせて前期難波宮と呼称し、『続日本紀』神亀3年（726）に造営着手された聖武朝の難波宮を後期難波宮として検出遺構と符合させている。

『日本書紀』大化2年（646）春正月条に記載される改新詔の其二には、「凡そ京には坊毎に長一人を置け。四つの坊に令一人を置け。以下略」とあり、かつて長柄豊碕宮の段階に条坊地割を測設したいわゆる条坊制都城の成立を想定する見解も見られた。しかし、近年の調査成果を見るかぎり、難波における条坊制都城の出現は7世紀後半の天武朝まで下ると考えられており⁹⁾、7世紀中頃の長柄豊碕宮は、京を伴わない宮のみの構造であり、その構造は一本柱塀で囲まれた南北700～900、東西600m程度の長方形の宮域内に前期難波宮の内裏・朝堂院およびいくらかの官衙施設を、そして周辺の平坦部に住宅を配置したものと考えられる¹⁰⁾。こうした内裏・朝堂院・官衙施設は、天武天皇の頃まで維持され天武による難波京造営に際して部分的に改造されて再利用されたと考えられている。

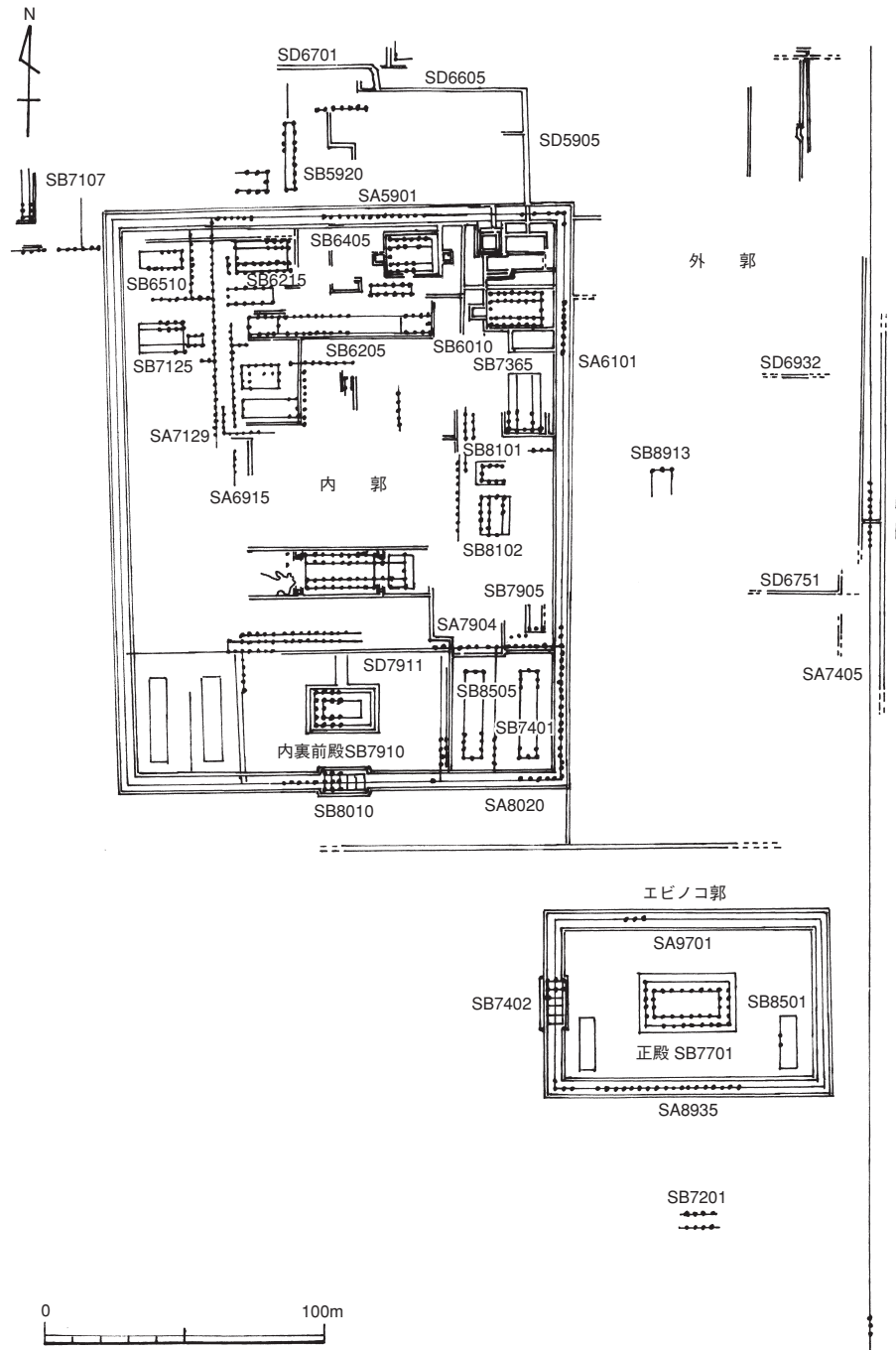


図2. 伝承飛鳥板蓋宮跡第Ⅲ期の構造（明日香村教育委員会文化財課編『飛鳥の宮殿』より作成。）

(2) 大津京

『日本書紀』天智6年（667）3月条に記載された近江遷都により短期間に造営された大津宮の実態は、昭和49年（1974）大津北郊の錦織2丁目字御所ノ内での門とそれに取り付く複廊回廊の検出以降、周辺地域での多くの大型建物や区画施設の検出を通して徐々に明らかにされて来た。さらに、錦織地区と平行して南滋賀・滋賀里・穴太の地域でも発掘調査が実施され、これらの調査成果とJR湖西線建設や国道161号バイパス建設に伴う発掘調査などを総合して大津宮中心部の構造だけでなく推定大津京域の実態なども明らかにされつつある。

宮中心部については、林博通により既往の検出建物や堀をもとに内裏地区を中心とした図3に示すような構造復原が試みられている¹¹⁾。その復原によれば、内裏南門（SB001）とその東西に取り付く回廊（SC001）により北の内裏地区と南の朝堂地区に分かれ、南門の北約89mに内裏正殿（SB015）が配置される。正殿の北と東・西は堀（SA003）や（SA002）によって区画され、さらに北側には東西棟の長殿が配置される。また、内裏中心部

区画の北にも建物（SB012）や倉庫（SB007・008）などがある。また、南の朝堂院地区には南北棟建物（SB006）があり、これを朝堂院建物と推定している。さらに、林は内裏と朝堂院を区画する南門と複廊回廊の存在や内裏南門の両脇の方形区画の存在などにほぼ同時期の前期難波宮（長柄豊碕宮）との類似点が認められると指摘している。大津宮ではこうした中心遺構を囲む宮域は未検出であるが、林はこれまでの調査成果や周辺部の微地形を踏まえて、錦織における主要な施設設置可能範囲を東西400m前後、南北700m前後と推定している¹²⁾。こうした範囲は難波長柄豊碕宮の宮域をひとまわり小さくしたような規模であり、宮域を考える上での指標となると考えられる。

大津京地域の条坊復原や方格地割に関する研究は、古くから喜田貞吉、米倉二郎、福尾猛市郎、藤岡謙二郎や秋山日出雄らにより試みられてきた¹³⁾。これらは大津宮の所在地が明らかにされていない時期の研究であり、大津宮中心部の位置が錦織地域に確定された現在では学術的価値は少なくなったと言える。しかし、近年大津宮が錦織地域に比定されて以降、大津京地域の方格地割の存在や条里地割について小笠原好彦、阿部義平や吉本昌弘により新たな見解が提示されている¹⁴⁾。小笠原・阿部は、大津宮の中軸線を基準線としてそれぞれ令大尺500尺・令小尺600尺（同じ長さ）を基準単位とする方格地割が施行され、そうした地割線に従って大津宮・穴太廃寺・崇福寺・南滋賀廃寺・園城寺が配置されたと推定する。特に、阿部は令小尺600尺の方格地割を高句麗の平壤城外城内に施行された条坊地割¹⁵⁾に近似すると指摘している。また、かつて福尾猛市郎が指摘した特殊地割と条里地割との関連性について検討した吉本は、大津京地域の条里が大津宮内裏正殿の東西中軸線と宮の中軸線から西18mの南北ラインを南北の基準線として大津宮廃絶後に施行されたとし、宮中軸線に沿って認められる幅36mの道代を大津京の朱雀大路と推定している。朱雀大路に関しては、大津宮中軸線に沿って古西近江街道が現存することから見て存在した可能性は高いと考えられる。

しかし、これまでの大津京域での発掘調査を見るかぎり、朱雀大路を含めて3氏の想定する方格地割線でいかなる道路遺構も検出されていない。そうなるとこうした方格地割も黒崎直が飛鳥地域でその存在を想定した計画地割と同じような性格の地割と考えるべきではなかろうか。現状では林博通が指摘するように¹⁶⁾、大津京域には碁盤目状の方格地割に沿って全域に条坊道路が測設されたとは考えにくく、内裏・朝堂から構成される宮室や寺院を地割計画線に基づいて造営し、官衙や官人の宅地などを穴太・滋賀里・南滋賀などの安定した扇状地上に分散的に配置した宮都が窺える。

Ⅲ. 条坊制都城の出現

7世紀初頭から7世紀後半の天武天皇の飛鳥浄御原宮に至る宮都・宮室の規模や構造は、第Ⅱ章で述べたように、天皇の居所である内裏を中心とした小規模な宮室、内裏・初步的朝堂・官衙から成る宮室や内裏・朝堂・官衙を一定の区画に納めた宮室を中心として周辺に寺院や貴族・官人の宅地を配置するものである。宮室・官衙・寺院・宅地などの配置は、飛鳥地域や大津京域においても一定の方格地割線に基づいて実施された可能性はあるが、後の条坊制都城に見られるような碁盤目状の道路は測設されていないようである。内裏・朝堂・官衙を宮域と呼ばれる一定の区画内に造営し、その周囲に長方形あるいは正方形の条坊制による街区を設けたいわゆる条坊制都城の出現は、天武天皇の難波京および持統天皇の藤原京に求められる。こうした条坊制都城は、8世紀代の首都あるいは副都の構造に継承されて行く。

1. 藤原京

藤原京は、持統8年（694）12月6日に宮室が飛鳥浄御原宮から藤原宮に遷されて以来、和銅3年（710）の平

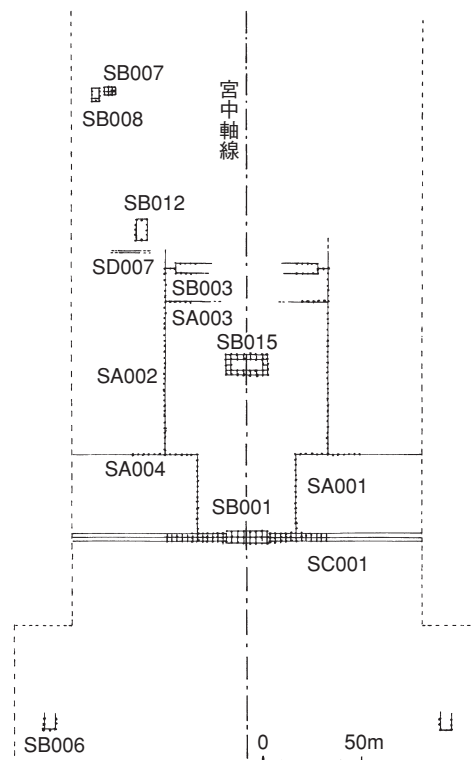


図3. 大津宮復原図（注11文献より作成。）

城遷都まで16年間の都城である。藤原京の構造については、これまで横大路を北京極、中ツ道を東京極、下ツ道を西京極、山田道を南京極とする京域を想定し、1坊の大きさを方900小尺（750大尺＝約265m）として、想定京域内に左京・右京それぞれ12条4坊の条坊地割が施行されたとする岸俊男による復原案¹⁷⁾が半ば定説とされていた。しかし、1975年以降こうした想定京域外で京の条坊の延長線上に一致する条坊道路が次々と発見されるにしたがって、秋山日出雄、千田稔、阿部義平、押部佳周、竹田政敬によりさまざまな拡大藤原京説が提示された¹⁸⁾。さらに、1996年の櫻井市教育委員会による東十坊大路（東京極想定大路）の発見や1997年の橿原市教育委員会による西十坊大路（西京極想定大路）の検出以降、小澤毅や中村太一¹⁹⁾により図4に示す1坊の大きさを平城京と同じ1800小尺（1500大尺）とし、内裏・朝堂院・官衙を配置した東西928m（2600大尺）、南北907m（2550大尺）の規模を有する宮域を中央に配置する10条10坊（約5.3km四方）の巨大な正方形の京域復原案が提示された。両氏による想定京域は、2004年に橿原市教育委員会により北六条大路の存在が確認されたことからみてもほぼ確定されたと言える。

こうした10条10坊の藤原京の誕生は、9里四方の王城の各辺に3城門を開き、中央に宮城を配置し、宮城の東に廟、西に社、前方に政府、後方に市を置き、東西・南北にそれぞれ9本の城内道路を設定する『周礼』考工記匠人営国条の影響と考えられており、藤原京は実在の中国都城を直接モデルとしたのではなく、中国都城の理想型に基づいて設計された理念先行型の都城であったとされる。

藤原京の造営開始は、680（天武9）年11月に発願された本薬師寺の伽藍が条坊地割に合わせて設計されていることから、それ以前に遡ることは明らかである。こうした先行工事は、天武天皇により建設予定地域全体に条坊道路の敷設が進められた『日本書紀』にも記述される新益京の造営工事であることは発掘調査でも確認されて

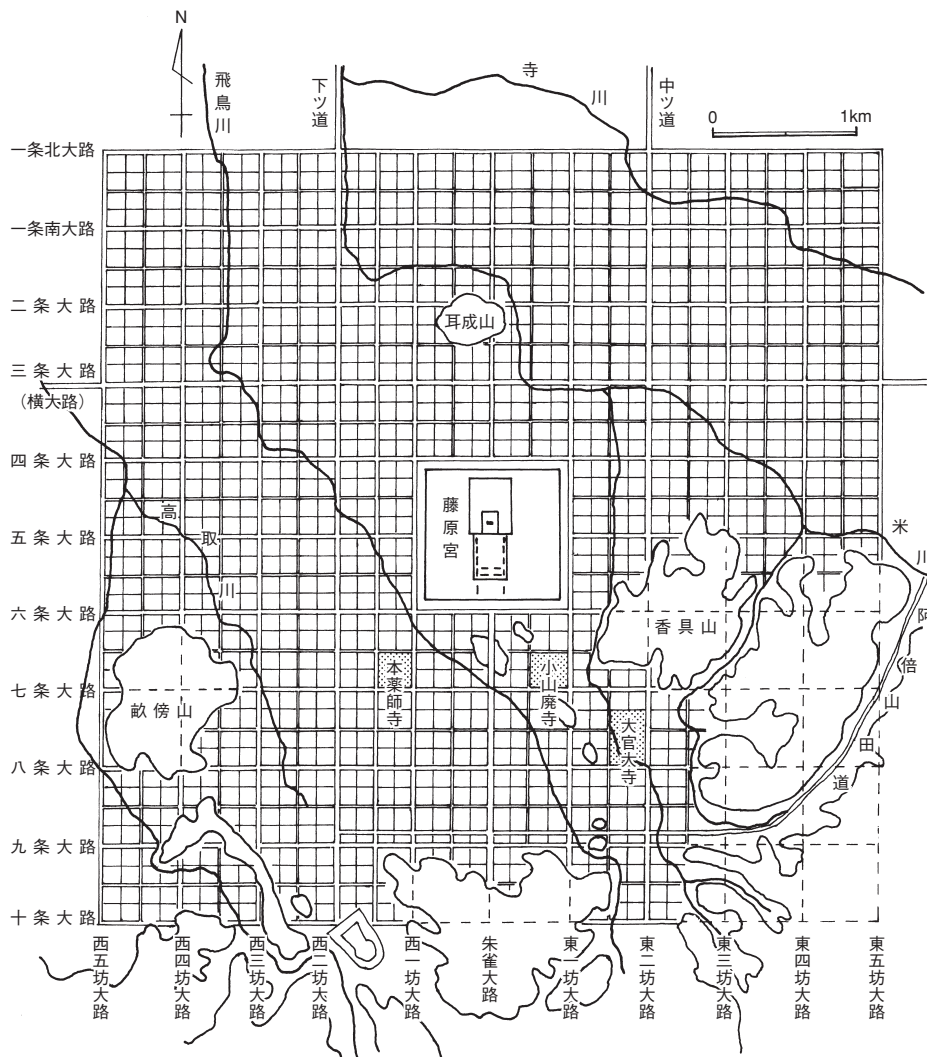


図4. 藤原京条坊復原図（注19文献より作成。一部変更）

いる。しかし、686（朱鳥元）年9月の天武天皇の崩御により工事は中断され、691（持統5）年頃から再開されたと考えられている。

2. 前期難波京

前期難波京段階の宮域については、1990年に朝堂院南方の宮中軸線上で発見された朱雀門と四天王寺東門とその東に遺存する条坊道路痕跡から復原できる。当該条坊道路を基準線として四天王寺周辺に残る750大尺地割を2500分の1地形図上に割り付けると、条坊の東西基準線の1本が内裏南門心に合致する。前期難波宮の内裏南門は、藤原宮の大極殿院南門に相当する門と考えられており²⁰⁾、藤原宮では大極殿院南門心を通る東西ラインが藤原宮域を南北に2等分する線となっている。

こうした事実に着目し宮域を藤原宮と同じ正方形と仮定すると、内裏南門と朱雀門心との距離387.1m（1100大尺）を内裏南門から北に折り返したラインを宮域の北限とし、東限と西限を宮の中軸線を中心に1100大尺ずつとった位置として774.2m（2200大尺）四方の宮域を復原できる²¹⁾。このように復原すると、宮域を画する大垣は周囲の条坊計画線から約140m（400大尺）控えた位置に設定されたことになる。藤原宮の200から220大尺と比べて大きいのが、その理由は、平坦な平野に造営された藤原宮と馬の背のような上町丘陵の上に造営された難波宮との地形条件の差であろう。

京の復原については、これまで多くの復原案が提示されて来た。しかし、筆者の復原による7・8世紀の微地形や検出遺構の分布からみれば、藤原京や平城京のような大きな京域の設定は不可能であり、上町丘陵を中心とした小規模な京しか想定できない。京の北辺中央に内裏・朝堂院・官衙を配置した774.2m（2200大尺）四方の宮域を置き、その東・西および南方に天王寺細工谷から寺田町付近に痕跡を留める朱雀大路跡や四天王寺周辺に遺存する750大尺（約265m）四方の条坊地割痕跡をもとに東西8坊（約2.1km）、南北16条（約4.2km）の京域が復原できる²²⁾。ただ、想定京域内でのこれまでの7世紀中頃から8世紀の遺構・遺物の出土状況から見ると、京の条坊街区は地形環境の良好な地域を選んで設定された可能性が高く、丘陵東西の開析谷や急傾斜地、丘陵東方の猫間川に沿った標高2m以下の低湿地などは、条坊街区から除外されていたと思われる²³⁾。

このように前期難波京は、藤原京とは異なり前代から上町丘陵北端に存在した難波長柄壱碁宮を改造して、唐の長安城と同じように北に宮を配置する都城の造営を企図したものと考えられる。京が縦長の狭い形態を採るのは地形の制約に因るものであろう。しかし、686（朱鳥元）年正月の宮の焼失により京の造営工事は中断し奈良時代の後期難波宮の造営に伴ってようやく完成したものと考えられる。ただ、『日本書紀』天武12年（683）12月条には、「凡そ都城・宮室一処に非ず。必ず両参造らしむ。故、先づ難波に都つくらむと欲ふ。是を以て、百寮の者各往りて家地を請はれ」とあり、天武朝に条坊街区の整備が進められたと推定される。

Ⅳ. 8世紀代の条坊制都城と宮室

1. 平城京

和銅3年（710）3月の藤原京からの遷都以降、途中天平12年（740）の恭仁京遷都や天平16年（744）の難波京遷都があったものの、延暦3年（784）の長岡京造営まで7代70余年にわたる首都であった。

奈良盆地を南北に貫く下ツ道を拡幅して朱雀大路とし、それを中軸線として南北9条（約4.8km）、東西8坊（約4.3km）の長方形区画を設定し、左京の東の五条大路から北に三坊分を拡大して外京としている。さらに、右京の北辺には、8世紀後半の西大寺・西隆寺の造営に伴って成立した半坊分の張り出し（北辺坊）が付加されている（図5）。

朱雀大路の北端に設けられた平城宮は左右対称ではなく、一辺約1km四方の正方形区画の東に、南北約755m、東西約265mの長方形の張り出し部を付加した形を呈する。こうした宮の周囲には、瓦葺の築地大垣がめぐられ、大垣には二条大路に面する南面、西一坊大路に面する西面、北面にそれぞれ3門と東張り出し部の南辺に2門の合計12門が宮城門として設けられていたと推定されている。また、大垣の造営にあたっては藤原宮と同様に京の条坊基準線から大宝令の大尺（70大尺）で割り付けられており、宮内の建物配置や地割についても大尺が使用されていることが明らかにされている²⁴⁾。

宮の中央区には、即位や元日朝賀などの国家的儀式や饗宴の場として使用された礎石建ちの大極殿と4朝堂を設けた朝堂院が配置されている。また、その東隣には壬生門の北側に内裏と日常的な政務に使用されたと考えられている掘立柱構造の12朝堂およびその正殿（大安殿）が置かれている。これら並立する2つの朝堂の存在は平城宮独自のものであり、前者は唐長安城大明宮の含元殿の模倣²⁵⁾であり、後者は藤原宮の継承とみられる。いず

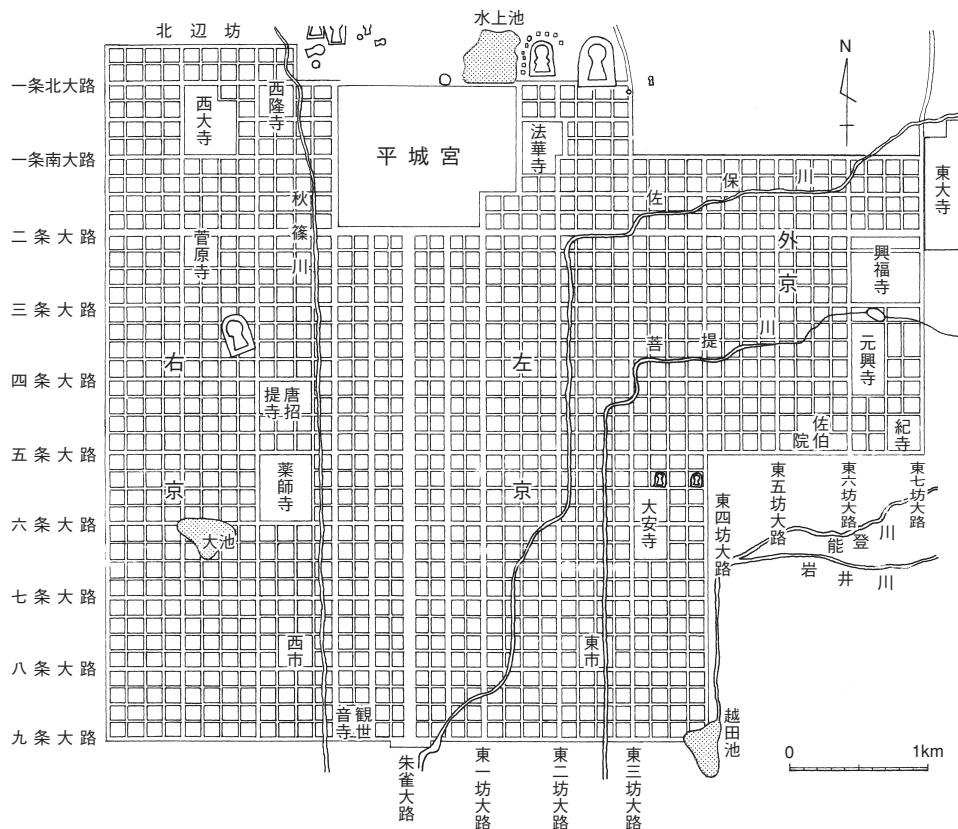


図5．平城京条坊復原図（田中琢『古代日本を発掘する三 平城京』岩波書店より作成。一部変更）

れにしても、こうした並立する2つの朝堂を宮の中央に設置したことが、結果的に他の宮殿や諸官衙を配置するための用地不足を生ぜしめ、張出し部を設ける必需が生じたのであろう²⁶⁾。

前者の大極殿は、天平12年（740）の恭仁京遷都に際して恭仁宮の大極殿として移築される。そして天平17年（745）の平城遷都後は、東区画に新たに礎石建ちの大極殿が造営され、それに伴い中心部全体が大幅に改造された。その結果、従来中央区に付随していた諸機能が東区画に移り、東区が儀式・政務の中枢となる。

奈良時代の前半・後半を通して、こうした中枢施設の周辺には、東宮・西宮・東院といった宮殿施設の他、律令体制を支える多数の官衙（二官八省）が配置された。また、西宮の南の4朝堂は饗宴の場として維持され、平安宮における朝堂院と豊楽院の並立形態成立の祖型となったと推定されている。

平城京の都市計画は、1500大尺（約531.9m）、750大尺、375大尺という方眼線を基準線に設計され、それら基準線の中軸線として大路、坊間（条間）路、小路が大宝令の大尺を用いて測設されており²⁷⁾、基本的には藤原京と同じ造営方法が採用されたと言える。すなわち、大路により囲まれた区画は坊と称され、坊内は東西・南北それぞれ3本の小路で区画され16の坪に分割される。坊の中央を十字型に通る小路が、坊間路・条間路であり、他の2本の坊間東（西）小路・条間北（南）小路よりも幅広く造られている。京内の宅地はこれら大路や小路で囲まれるが、設定された道路幅によりその規模は様々な長方形を呈することになる。ただ、京内では小尺を使用した道路も検出されており、それらは和銅6年（713）の小尺の採用後に設定された道路と考えられている。

京内の道路規模をみると、最大の道路は朱雀大路であり、側溝心々間210大尺（約74m）の幅を持ち、その規模は藤原京の3倍におよぶ。朱雀大路に次ぐ道路は、宮の前面を東西に走る二条大路であり、105大尺（約37m）と朱雀大路の1/2で設計されている。その他の大路は、40大尺（約14m）～70大尺（約37m）と様々である。また、条間路・坊間路は藤原京と同じ25大尺（約9m）で設計されており、小路も同じく20大尺（約7m）前後を示す。

2. 恭仁京

恭仁京は天平12（741）年12月から天平16（744）年2月の難波宮遷都までの約3年間の宮都である。恭仁宮の本格的な発掘調査が始まるのは1974年からであるが、調査に先駆けて足利健亮により恭仁京城の復原案が提示された²⁸⁾。足利は、京都府相楽郡加茂町瓶原に所在する国分寺金堂跡（恭仁宮大極殿跡）の南に朝堂院、北に内裏

を設定し、これらを囲む8町（約1km）四方の宮域を想定した。さらに、京域については基本的に南北9条、東西8坊の平城京の平城京原初プランをあてはめて計画されたものとし、左京の中軸線を大極殿および宮域の中軸線とし右京中軸線を木津町の「作り道」にあてて復原し、左・右京それぞれ4坊の条坊を想定した。その結果、間に非条坊地区を介在させ、その東西に左京・右京を配置する東西約6.1km、南北約4.8kmの変則的な京域を復原した。

1974年から今日に至る発掘調査によって、足利の想定宮域内で東西約560m、南北約750mの大垣で囲まれた長方形の宮域が明らかにされた。さらに、宮域内では、東西9間、南北4間の大極殿を中心とした大極殿院、東西幅約125mの朝堂院地区、朝集殿院が南北に並んで存在することや大極殿北方に掘立柱塀で区画された2つの内裏地区があることが確認されている。そのうち、内裏西地区は東西約97.9m（約330小尺）、南北約127.4m（約430小尺）である。京の条坊に関連する遺構は、ほとんど未確認という状況であるが、宮南面大路（二条大路）の南北側溝、宮東面大路（東一坊大路）の東西側溝や推定朱雀大路の東側溝など条坊道路の存在を窺わせる遺構が3箇所検出されている²⁹⁾。『続日本紀』天平13（741）年9月条に見られる「賀世山の西の路より東を左京とし、西を右京とす。」からすれば、条坊制による京が存在した可能性は高いと言える。

3. 長岡京

長岡京は、桓武天皇により延暦3年（784）6月10日藤原種継を長官とする造長岡宮使を定め、宮・京を含めた造営を開始し、延暦13年10月の平安遷都までの10年5カ月余り存続した都城である。

京の北辺中央に配置された宮域は、当初の約1006m四方（ABCD）から後に南北約1545m、東西約1006mの長方形（EFGH）に拡大されるが³⁰⁾、宮域内部の構造は、基本的には内裏・大極殿院・朝堂院を南北に配置し、周囲の空間に官衙を置く形態を採用している。

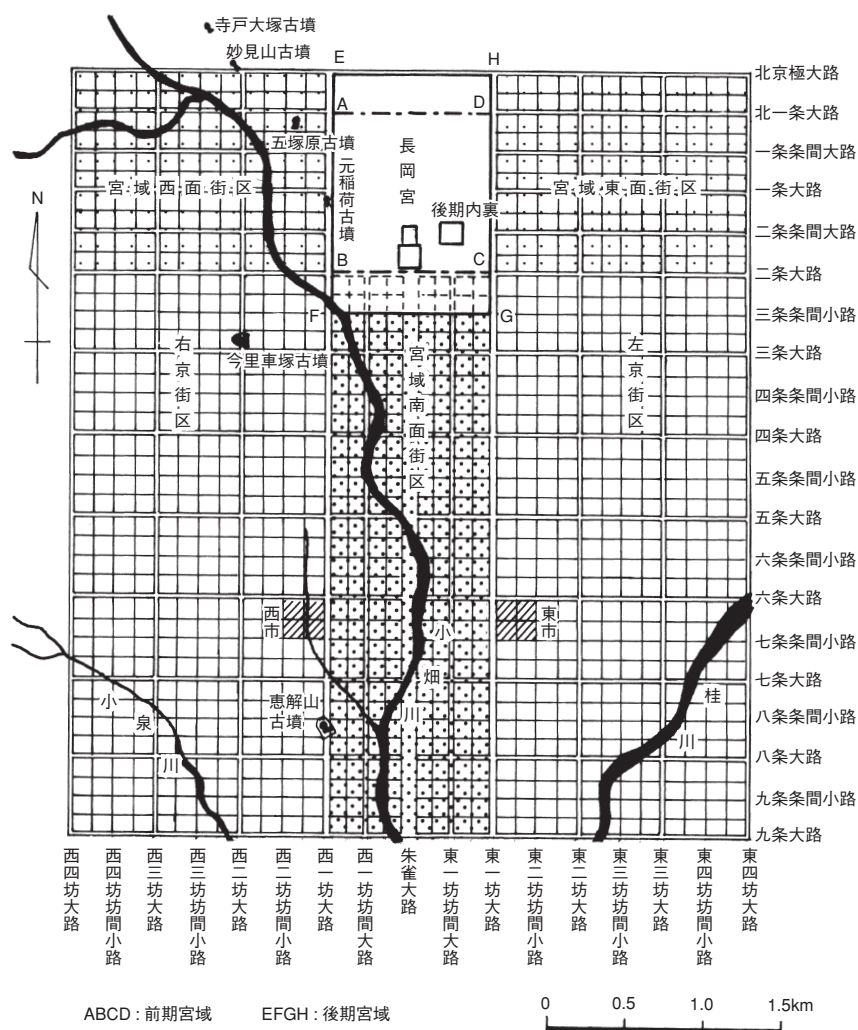


図6. 長岡京条坊復原図（注31文献より作成。一部変更。）

長岡京は図6に示すように、設計方法がそれぞれ異なる宮城南面街区、宮域東・西面街区、左・右京街区の3種類5地域の街区を合体させて造営されており、山中章はこれを「長岡京型」条坊制と呼称している³¹⁾。しかし、基本的には1坊の大きさを1820小尺（1小尺＝29.6cm）とし、東西8坊、南北9条とする設計の下に造営された京であり、京の中軸線（朱雀大路）の北辺に正方形もしくは長方形の宮域を配置している。そして、長方形宮域が出現する長岡京後期に北一条大路以北が付加されたものと考えられる。山中章の説に従って各街区の構造を述べると以下ようになる。

宮城南面の街区は、宮城南の東・西一坊大路間に設けられた条坊であり、その中央には、京中軸線の東西に宅地側から120小尺ずつの敷地を割いて180小尺の路面幅を確保した朱雀大路が設けられている。また、一坊大路は、京の中軸線から1820小尺のラインを隣接する二坊側の側溝位置として、宮域および一坊の宅地から敷地を割いて100小尺の道路幅を確保している。そのため南面街区の坊は平城京と同じく東西に狭い縦長の形を示し、大路・小路を組み入れた坊内の宅地は、東西35丈、南北40丈の長方形を呈する。

一方、宮域東・西面街区は、二条大路以北で宮域の東と西に設けられた3坊分の条坊であり、大路・小路を組み込んだ坊内の宅地は、東西40丈、南北35丈または37.5丈の2種類で構成される。さらに、左・右京街区は、二条大路以南で東・西一坊大路の外側に広がる条坊であり、ここには40丈四方の宅地が並ぶ。また、条坊道路は、朱雀大路から小路に至る5段階で設定されていたようである。

4. 平安京

延暦13年（794）10月22日、桓武天皇により長岡京より遷都され、途中平清盛による福原遷都はあるものの、大内裏の放棄される治承4年（1180）まで古代都城として存続した。京の建設に際しては、京の北方に位置する船岡山を通る南北線の中軸線として東の鴨、西の御室川の間に南北9条半・東西8坊の京域を設定し、京域北端中央に南北2条半・東西2坊分の長方形の宮域を配置している。足利健亮によれば、京の造営に伴って左・右京の2坊の中央に人工の南北直線河川（東・西堀川）を開削し、両堀川間の距離588丈（1758m）を基準として京の東・西の限りが設定されたようである³²⁾。

宮域内は、壬生・皇嘉門・土御門の各大路を宮内に延長した道路により中央区・北区・東区・西区の4つのブロックに区分されている。中央区は平安宮の中枢部であり、大極殿・朝堂院を中心に、西に饗宴施設としての豊楽院、北に内蔵寮や中和院等の官衙を配し、東に中務省・太政官・民部省の各官衙を並べ、北東に内裏を配置している。西区には、北から図書寮・右近衛府・右兵衛府・造酒司・典薬寮・左馬寮・治部省・刑部省などの官衙が、東区には同じく主殿寮・左近衛府・左兵衛府・大膳職・宮内省などの官衙がそれぞれ配置されている。さらに、北区には大蔵省を中心とする諸官衙が東西に並ぶ³³⁾。

長岡京で採用された400尺四方の均等宅地を全域に配置し、宅地と大路・小路の道路を集積して京の条坊が形成されている。すなわち、各坊は小路により400尺四方の16の宅地区画から構成されており、400尺四方の宅地は平城京の坪に対して町と呼称され、1つの町の中は4行8門に区画されていた。また、4町が1単位となり保と呼ばれた。

京内の道路は、『延喜式』左右京職の京程条から築地心々幅等の規模を把握できる。それによれば、朱雀大路（28丈・約84m）、二条大路（17丈・約51m）、その他の大路（12丈・約36m、10丈・約30m、8丈・約24m）、小路（4丈・約12m）と6段階で測設されていたことがわかる。ただし、発掘調査の成果によれば、小路は路面幅が4.1～6.4mと『延喜職』記載の数値をかなり下回ることが報告されている。

5. 紫香楽宮

『続日本紀』天平14（742）年2月条の「始めて恭仁京の東北道を開き、近江国甲賀郡に通せしむ。」は、恭仁京から甲賀郡への道路の開通を伝えるが、この道路の測設は紫香楽宮の造営開始に関連するものと考えられている。しかし、紫香楽宮は天平15年から天平17年というきわめて短期間の宮室であったこともあり、史料も少なくその実態については不明な点が多かった。しかし、2000年の滋賀県甲賀郡信楽町の宮町遺跡第28次発掘調査で東西2間、南北22間以上の母屋に四面庇を付した長大な建物が検出されて以降、宮中心部の構造が徐々に明らかになって来ている。

その構造は、南側に東西7間、南北2間の母屋に四面庇を巡らせた正殿的な建物を中央北に置き、その両側に東西2間、南北25間の母屋に四面庇を設けた長大な朝堂を配する「コ」字型の朝堂院を配置し、その北側に東西堀を隔てて庇を巡らせた大型建物を中心とする別区画を設けるものである³⁴⁾。

さらに、宮町遺跡から出土した多くの木簡や墨書土器の分析を通して、宮町にかつて多くの官人が勤務しており、官衙が建ち並んでいたと推定されている。

V. 日本宮都の諸類型

第Ⅱ章から第Ⅳ章で7世紀代の宮都・宮室，7世紀後半に出現する条坊制都城および8世紀代の条坊制都城と宮室の規模・構造について考察して来た。

飛鳥地域を中心に造営された7世紀代の宮都・宮室は，構造が明らかにされているものはわずかであるものの，おおよそ7世紀中頃を境にして，その前後で宮室の規模や構造の上で大きな変化が見られるようである。すなわち、『日本書紀』にみられる記事から見ても正宮造営までの一時的，仮宮的な宮室とみなされる舒明天皇の

表1. 日本古代宮都・宮室の諸類型

	非条坊型宮都			条坊型宮都	
	内裏・初歩的朝堂型	内裏・初歩的朝堂・官衙型	内裏・朝堂・官衙型	周礼型	北闕型
600年	推古 豊浦宮 593 小墾田宮 603 舒明 岡本宮 630 百濟宮 640 皇極 小墾田宮 642 飛鳥板蓋宮 643				
650年	齊明飛鳥板蓋宮 655	齊明 後飛鳥岡本宮 656	孝徳 難波長柄豊碕宮 652 天智 大津宮 667 天武 飛鳥浄御原宮 672 持統 飛鳥浄御原宮 687	持統 藤原京 694 文部 藤原京 697	天武 難波京 683
700年				元明 藤原京 707	元明 平城京 710 元正 平城京 715 聖武 恭仁京 740 聖武 難波京 744 聖武 平城京 745
750年			聖武 紫香楽宮 744		孝謙 平城京 749 淳仁 平城京 758 称徳 平城京 764 光仁 平城京 770 桓武 長岡京 787 桓武 平安京 794

田中宮・厩坂宮や斉明天皇の飛鳥川原宮を除外するとしても、推古天皇の豊浦宮・小墾田宮、舒明天皇の飛鳥岡本宮（伝承飛鳥板蓋宮跡Ⅰ期）・百濟宮や皇極天皇の小墾田宮といった7世紀前半の宮室は、数百メートル四方程度の小規模な宮室であり、構造的にも天皇の私的空間（居所）に『日本書紀』の推古朝の外国使節団来訪の記事から窺えるような小規模な公的空間（初歩的朝堂）を付加した構造（内裏・初歩的朝堂型）であったと推定されるのに対して、7世紀中頃になると、皇極・斉明天皇の飛鳥板蓋宮（伝承飛鳥板蓋宮跡Ⅱ期）および斉明・天武天皇の後飛鳥岡本宮（伝承飛鳥板蓋宮跡ⅢA期）に見られるような天皇の私的空間（内裏）と初歩的朝堂を内包した内郭の周囲に官衙施設を付随させたもの（内裏・初歩的朝堂・官衙型）が出現する。さらに、7世紀中頃から後半になると、孝徳天皇の難波長柄豊碕宮、天智天皇の大津宮や天武・持統天皇の飛鳥浄御原宮（伝承飛鳥板蓋宮跡ⅢB期）のように、東西400～600m、南北700m以上とそれまでの宮室よりはるかに大きな規模の宮室を有し、従来のような内裏の南に付属させた小規模な初歩的朝堂ではなく内裏地域から独立した大規模な朝堂が形成される（内裏・朝堂・官衙型）。特に、飛鳥浄御原宮では難波長柄豊碕宮や大津宮には見られない朝堂の正殿としての大極殿（エビノコ郭内の正殿）が出現し、藤原宮以降の宮室に継承されていくことになる。ただ、飛鳥浄御原宮の朝堂は、東西約100m、南北約65mと小規模である。それはおそらく内郭・外郭南側の空間の狭小さに起因するものと思われ、官僚制機構の整備が進む中で、天武天皇はより広大な朝堂の造営を企図して飛鳥の北方に新益京の造営を計画したと考えられる。

しかし、相原嘉之による7世紀代の飛鳥地域復原図、難波長柄豊碕宮や大津京の実態からもわかるように、これら3つの型の宮室が形成された時期にはいずれも条坊制による碁盤目状の街区は伴わない。ただ、最後の内裏・朝堂・官衙型の宮室は、基本的には天武朝の難波京や持統朝の藤原京といった7世紀後半から末に出現する条坊型宮都（都城）の中核部を構成し、平城京以降の都城に継承される。

天武天皇の難波京を嚆矢とすると考えられる我が国の条坊型宮都（都城）は、『周礼型』と『北闕型』の2つのタイプに分けられる。前者は、宮を都城の中央に配置する持統・文部・元正天皇の藤原京であり、後者は、宮を都城の中央北寄りに配置する構造を採用し、天武・聖武天皇の難波京、平城京、長岡京および平安京がこれに属する。恭仁京もおそらく同じであろう。こうした巨大な条坊型宮都（都城）の出現の背景には、絶対的な権威と権力を保有して統治権を掌握した天皇のもとに太政官を頂点とする巨大な官僚機構を1箇所に集住させ、国政を運営する律令国家の成立があったことは言うまでもない。

小稿では、規模と構造という2つの視点から表1に示すような7～8世紀の日本宮都・宮室の類型化を試みた。しかし、飛鳥地域を中心に展開した7世紀代の宮都・宮室の多くは、長年の発掘調査を経た今日に至っても、その規模・構造の一端を知り得る程度の状況であり、実態についてはほとんど明らかにされていない。それ故に、今回試みた類型化は推定によるところも多く、今後の発掘調査の進展により変更すべき点も多く出てくるものと予想される。

（注）

- 1) 岸 俊男「飛鳥と方格地割」, 史林53巻4号, 1970, 1-41。
- 2) 網干善教「倭京（飛鳥）地割の復原—飛鳥地方の寺院跡を中心として—」, 関西大学考古学研究紀要3, 1977, 36-50。岸 俊男「飛鳥と方格地割」, 史林53巻4号, 1970, 1-41。藤岡謙二郎『日本歴史地理総説古代編』, 吉川弘文館, 1975, 16-42。千田 稔「道と地割の計画」—河内磯長谷の古墳配置の問題に関連して—, 環境文化51号, 1981, 38-52。
- 3) 井上和人「飛鳥京域の検証」, 考古学雑誌第21巻第2号, 1986, 43-78。
- 4) 黒崎 直「飛鳥の道路遺構と方格地割」, 遺跡学研究第2号, 2005, 68-79。
- 5) 相原嘉之「飛鳥の道路と宮殿・寺院・宅地」, 条里制・古代都市研究第15号, 1999, 5-33。
- 6) 奈良国立文化財研究所「豊浦寺の調査」, 飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報11, 1981, 61-63。同「豊浦寺第3次調査」, 飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報16, 1986, 57-67。小澤毅「豊浦寺の調査第133-9次」, 奈良文化財研究所紀要2005, 2005, 72-73。
- 7) 松村恵司他『河原寺寺域北限の調査—飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告』, 奈良文化財研究所, 2004。
- 8) 小澤 毅「伝承板蓋宮の発掘と飛鳥の諸宮」, 橿原考古学研究論集第9, 1988, 367-414。
- 9) 木原克司「我が国における条坊制都市の成立をめぐる—研究の現状と展望—」, 人文地理39-5, 1987, 34-54。積山 洋「難波京の方格地割をさぐる」, 郵政考古No.33, 1997, 19-38。

- 10) 佐藤 隆「前期難波宮」,『都城における行政機構の成立と展開』,奈良国立文化財研究所,1997,19-34。
木原克司「古代宮都と周辺景観の保全—難波京と古代大坂平野を事例として—」,歴史地理学第49 巻1号,2007,5-18。
- 11) 林 博通『考古学ライブラリー27大津京』,ニュー・サイエンス社,1984,109-119。
- 12) 林 博通『大津京跡の研究』,思文閣出版,2001,97-98。
- 13) 喜田貞吉「大津京遷都考」,歴史地理15-1・2,1910,5-10,133-142。米倉二郎「条里よりみたる大津京」,歴史と地理34-1,1934,1-17。福尾猛市郎「大津京」,『大津市史』上,大津市役所,1942。藤岡謙二郎「古代の大津京域とその周辺の地割に関する若干の歴史地理学的考察」,人文地理23-6,1971,1-15。秋山日出雄「〔飛鳥京〕と大津京都制の比較研究」,『飛鳥京一』,奈良県教育委員会,1971,269-358。
- 14) 小笠原好彦「大津京と穴太廃寺」,『考古学古代史論巧』,伊東信雄先生追悼論文集刊行会,1990,465-485。
阿部義平「日本列島における都城形成(2)—近江京の復元を中心として—」,国立歴史民俗博物館研究報告45,1992,1-46。吉本昌弘「大津京跡の方格地割」,歴史地理学48-3,2006,21-28。
- 15) 田中俊明「朝鮮三国の都城制と東アジア」,『古代の日本と東アジア』,小学館,1991,391-422。
- 16) 林博 通『大津京跡の研究』,思文閣出版,2001,205-213。
- 17) 岸 俊男「宮域および京域の推定」,『藤原宮』,奈良県教育委員会,1969,106-126。
- 18) 秋山日出雄「藤原京の京域考—内城と外京の想定—」,檀原考古学研究所紀要考古学論巧4,1980,1-8。
千田 稔「歴史地理学における〔復原〕から〔意味論〕へ—藤原京を事例として—」,『地理の思想』,地人書房,1982,121-133。阿部義平「新益京について」,千葉史学9,1986,13-43。押部佳周「飛鳥京・新益京」,『古代史論集』上,塙書房1988,327-349。竹田政敬「藤原京十二条大路と山田道」,『堅田直先生古稀記念論集』,真陽社,1997,405-413。
- 19) 小澤 毅「古代都市藤原京の成立」,考古学研究44-3,1997,52-71。中村太一「藤原京の条坊制」,日本歴史612,1999,1-19。
- 20) 中尾芳治『難波京』,ニュー・サイエンス社,1986,50-52。
- 21) 木原克司「前期難波宮の宮域をめぐって」,徳島地理学会論文集第4集,2001,155-164。
- 22) 木原克司「我が国における条坊製都市の成立をめぐって—研究の現状と展望—」,人文地理39-5,1987,34-54。
- 23) 木原克司「古代難波地域周辺の景観復原に関する諸問題」,大阪の歴史48,1996,1-25。
- 24) 井上和人「古代都城制地割再考—藤原京・平城京を中心として—」,奈良国立文化財研究所研究論集Ⅶ,1984,1-102。
- 25) 鬼頭清明「日本における大極殿の成立」,『古代史論叢中巻』,吉川弘文館,1978,41-74。
- 26) 小澤 毅『日本古代宮都構造の研究』,青木書店,2003。
- 27) 井上和人「古代都城制地割再考—藤原京・平城京を中心として—」,奈良国立文化財研究所研究論集Ⅶ,1984,1-102。
- 28) 足利健亮『日本古代地理研究』,大明堂,1985,59-111。
- 29) 森 正他『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』,京都府教育委員会,2000。
- 30) 山中 章『長岡京研究序説』,塙書房,2001。
- 31) 山中 章『日本古代都城の研究』,柏書房,1997。
- 32) 足利健亮「都城—平安京—」,『歴史がつくった景観』,古今書院,44-57。
- 33) 角田文衛『平安京提要』,角川書店,1998。
- 34) 信楽町教育委員会文化財調査室『宮町遺跡第30次発掘調査現地説明会資料』,信楽町教育委員会,2002。
- 35) 鈴木良章・栄原永遠男「紫香楽宮関連遺跡の調査—宮町遺跡の発掘調査を中心に—」,条里制・古代都市研究第16号,2000,49-93。

The Structure and types of Japanese Imperial cities and Palaces

KIHARA Katsushi

(Key word : Imperial cities and Palaces, Jōbō system Imperial cities,Types)

This study try to divide into several types Japanese Imperial cities and Palaces in the seventh and eighth century from two viewpoints of scale and structure. Moreover I investigate about formation of Japanese Ritsuryō state by analysis of those types.

As a result of study, Imperial cities and Palaces in the seventh and eighth century were divided into two types of Un-Jōbō system imperial city and Jōbō system imperial city. Moreover the former is divided into three types,Palaces formed by Dairi as a residence of Emperor and elementary Chōdō, Palaces formed by Dairi, Chōdō and Kanga as a government office. The latter is divided into two types of Shurai type and Hokketsu type. And Jōbō system imperial cities were constructed by organization of Ritsuryō state.